

経営者の四季

2019 AUGUST no.518

8月号



今月の
テーマ

独自の技術を新分野に生かす

100年間培ったスキーポール技術を新分野に展開／株式会社シナノ
(長野県佐久市)の柳澤光宏社長(写真)。スキーポールの製造技術を生かし、「登山用ポール」「高齢者用杖」「ウォーキング用ポール」を開発し、スポーツ市場から介護福祉市場まで、幅広く展開している(企業事例1)。

スキーポールの製造技術を応用 “杖”で超高齢社会を支える

国産スキーポールのトップメーカーとして、創業100周年を迎えた株式会社シナノ。現在は、高齢者用杖やウォーキング用ポールを開発するなど、介護福祉市場などにも進出している。

北陸新幹線・佐久平駅の近くにある株式会社シナノは、スキーポール（ストック）などを製造・販売する企業だ。

創業は、日本にスキー文化が伝来して間もない1919年。創業者・柳澤光三氏によって前身となる「信濃スキー製作所」が設立され、今年1月に100周年を迎えた。

同社のスキーポールは、スキーヤーの研究を重ねて導き出したグリップの「握りやすさ」、ポールの操作性能の指数を独自に算出し実現した「振りがやすさ」、スキーヤーの安全を守る「強度」という3つのポイントにこだわり、日本人の体型に合った設計で製品づくりが行われている。

トップメーカーとして躍進するも バブル崩壊により倒産の危機に

1972年に開催された「第11回冬季オリンピック札幌大会」をきっかけに、国内にウィンタースポーツブームが到来。スキー人口を爆発的に増大させた。同社は国産スキーポール専門のトップ

メーカーとして業界をリードする企業に成長した。

ところが1991年のバブル崩壊や、スキー人口の減少によりわずか数年で生産数は1/3にまで落ち込み、売上は激減した。倒産の危機に陥ったことから1998年に、新潟の企業である有沢製作所との合弁により新会社を設立。「新生」シナノが誕生したのだった。

5代目現社長・柳澤光宏氏は語る。

「2000年に父が4代目社長として就任し、スキーポールの技術を生かして、時代のニーズに合った製品づくりを行うことに決めたのです」

まずは、かねてから開発していた、登山時に体の負担を軽減する、登山用ポールを開発した。

スキーポール技術を生かし新製品開発 高齢者用杖で新たな市場へ

柳澤社長は、大学卒業後に大手企業の勤務を経て、2003年に同社に入社した。1999年から歩行を補助する高齢者用杖の開発に取り組んでいた頃



長年培ってきた「グリップ」の製造技術はさまざまな分野の商品に生かされている(写真上)。
スキーポール専門メーカーとして国内トップシェアを誇る同社。創業100年という製造技術を生かして高齢者用杖やウォーキングポールなどを開発している(写真左)。



シナノの 新分野参入への戦略

- ① スキーポール製造の技術を生かして
新分野の製品を開発する
- ② 独自の印刷技術を開発するなど
機能性だけでなくデザイン性も重視する
- ③ “楽しみ”と“健康”に役立つ製品づくりを
続ける

だ。高齢者用杖のニーズは高まりつつあったものの、中国産・台湾産のものが主流で、安価ではあるが品質はあまり良いものではなかった。

同社が開発した高齢者用杖は、培ってきたスキーポール製造技術を応用し、体重をかけても杖を握る手のひらに負担がかからないグリップや、全身を安全に支える強度と機能性を考えたものだった。

さらに、人気のある長さ調節できる伸縮杖では、半身麻痺などの人のために、片手で、簡単に杖を伸び縮みできる製品も開発している。利用者からの要望が多いことから作られた製品であるという。

また、機能性だけでなく、デザイン性にもこだわっているのが同社製品の特色の一つだ。

本来、金属でできたポール（筒）状のものに、多くの色が使われた写真や絵柄を印刷するのは難しい。そこで同社では、独自の印刷技術を開発した。他社では不可能な加



高齢者の歩行を助ける高齢者用杖。機能性だけでなく、デザインにもこだわっている。

飾技術で、写真や漫画などで使われる鮮やかな色をもそのままポールに印刷する。

「高齢者用杖は地味なものが多く、使うのに抵抗がある方が多い。当社の印刷技術なら、華やかな絵柄や和紙のような凹凸など、デザイン性の高い製品を提供できます。オーダーメイドでお孫さんの写真を印刷した杖を作ることも可能です」

この技術は、水道管のカバーにイラストを印刷するなど、他業界の製品にも活用できるという。

また、同社は健康分野にも参入。両手にポールを持って歩くことで、上半身が自然に動かせるため、普通に歩くよりも運動効率が上がる運動法「ポールウォーキング」専用ポールの開発を行っている。

「ポール技術でウォーキングライフを支える」 をモットーに、次の100年へ

「ウォーキング人口は3,000万人を超えと言われて

います。じわじわとポールウォーキングの認知度は上がっているので、今後販売数が伸びるのではないのでしょうか」

業績を回復し、有沢製作所との合併契約を発展的に解消した同社は、「ポール技術でウォーキングライフを支える」を合言葉に、スポーツ市場から介護福祉市場まで幅

広く事業を展開。2018年度決算期の売上は約8億円で、近年は高齢者用杖の売上の伸びが顕著だ。

2011年に社長に就任した柳澤社長は、2015年に東京・有楽町に初の直営店「ステッキ工房シナノ」を出店。2018年9月には、2号店となる吉祥寺店もオープンしている。今後は海外進出にも積極的に取り組み、さらなる躍進を目指す。

「私たちの使命はみなさまの“楽しみ”と“健康”に役立つこと。次の100年に向け、今後も出かけるのが楽しくなるような製品づくりを続けていきたいです」

健康・福祉の時代をポール技術で文字通り「支える」企業として、株式会社シナノはこれからも進化を続けていく。 e